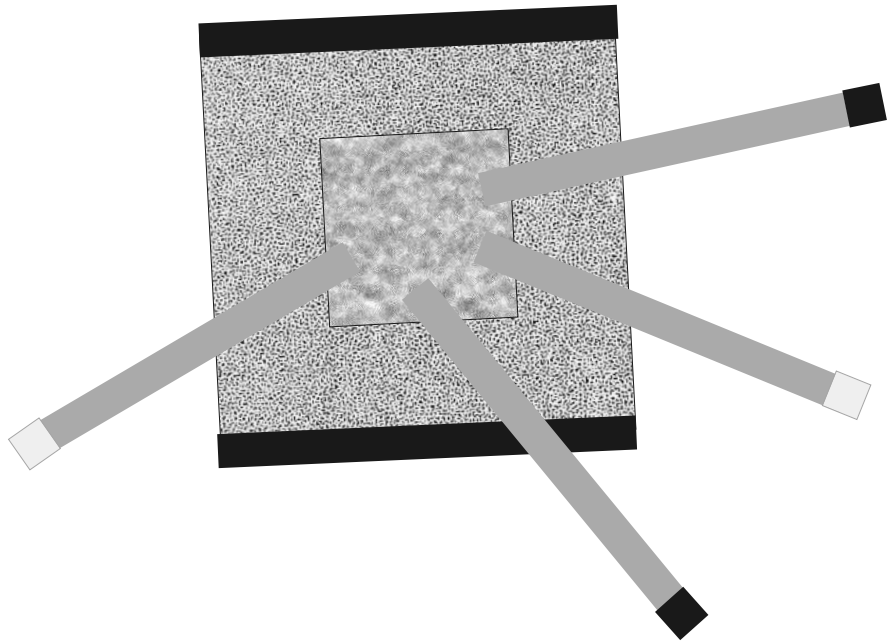

月 刊

MéLange

Vol.156



2020.10.25

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.156.2020.10.25

「月刊めらんど」編集部

カフカ教団 ⑩ 高木敏克

月明かりの街に出ると、目の前に「ティトレリ」という懐かしい赤いネオン文字の看板のプールバーが現れた。ここでわたしは彼女に出会ったのだ。彼女の名前は月子、みんなはルナと呼んでいた。いつまでもわたしを待っているのかもしれない。

バーカウンターは三日月型に「バーテンダー」を囲んでいた。ルナは少し腰をゆるめた弓なりの姿勢で肘をついていた。その腕で顎を支えて反対の手でグラスを傾けていた。「やっときたのね。ずっとあなたを待ってたわ」

彼女が背負っているのもわたしと同じ濡れ衣の運命だ。被告人同士、黙って座っているだけでも相手がわかる。同じ悲しみを背負いあっているからだ。

わたしはオロオロしながら地下水道の仲間を探した。彼らは早速にダンスを始めていた。

「まるで、ここから見ていると魂が踊っているみたいに見えるわ。もう、持続不可能な光がこの世から消えようとしているのに、この人間は夜の蜉蝣のように翼を燃やし続けているみたい。わたしも自殺に失敗してから昼蜉蝣から夜蜉蝣になっちゃった。死ぬ希望もなくなっちゃったからね。もう、愛とか恋とかいう話はやめてね」

「ずいぶん久しぶりだというのに、相変わらずだな」と、わたしは遠い昔を思い出した。そして、ここはもう記憶の世界なのだと思つたと涙がたまらなく落ちて流れた。

「実はね、わたし、裁判所の被告席に座らされたの。背後には会社の上司が座っていて、じつとわたしの背中を見ながらわたしが何をいうか耳をそばだてていたわ。時々会社の弁護士と目配せしながら、わたしが会社の役者として間違わずに決められた台詞を言っているか上司の部長と課長がメモを取っていた。わかります？ その紙の音まで聞こえたのよ。わたしをなんとか救わなければという表情をしながら、実はわたしを地獄の底につき落とそうとして会社の弁護士と組んで男二人の罪をこのわたしに身代わりの罰を与えようとしたの」

「その話は前にも聞いたけど、商社の英語の契約書に翻訳者の君がサインさせられた。そして、その契約が相手国から訴えられたという話だ。英語に関して文盲の上司は何も知らないと言つて訴えられなかったって話だ。日本の商社じゃ部長は責任回避の席なんだ。実はね、僕も被告人でずっと尾行されているみたいだ」

詩・俳句

- 知らないかたちに恋して……………大西隆志 4
 リンゴとバスケット……………高谷和幸 5
 中腰……………野口裕 6
 電子音声 詠 (俳句)……………岩脇リーベル豊美 6
 羊歯／餡パン……………中嶋康雄 7
 うす風が……………月村 香 (月式部) 10
 ショックなことがあると、すぐ目がまわり気を失ってしまう私……………黒田ナオ 11
 亡失のまなかい……………大橋愛由等 12
 呪われた詩人へのオード……………にしもとめぐみ 13
 骨董喫茶店……………高木敏克 14

連載小説

- 10回目／「カフカ教団」……………高木敏克 3

詩評

- 中野重治詩集を読む……………大橋愛由等 9

連載エッセイ

- 〈本のひと皿〉⑤「牡蠣のなかの宇宙」……………安城位久緒 8
 益田つこ通信 50号「お前の足もとに気をつける」……………元正章 15
 神戸詞あしび 144「スペインワインの魅力と嗜好の変化」……………大橋愛由等 16

編集部日より★76／気の早い話だが、来年(2021年)前半のカルメンにおけるフラメンコライブのスケジュールが10月半ばで決定した。カルメンは2005年から月に一回のフラメンコライブを始めた。スタート時はひとつのフラメンコ教室のひとたちがもっぱら出演していた。やがて出演するグループが増えていく。増えていったのは、出演者の中で、独立してグループを結成したり、教室をあらたに作ったりするという枝分かれ現象が起こるためである。その枝分かれ現象を促しているのは私である。舞台を見ていて、これほど目をつけたバイラオーラ(女性のフラメンコダンサー)に「あなた、自分のグループを持ってカルメンに出演するつもりある？」と声をかけるのである。そうして声がけたバイラオーラは、自分の周辺にいる仲間に声をかけて独立するのだ。関西はフラメンコ人口が多いのだが、その人口にみあうタブラオ(フラメンコのライブハウス)が少ないのが現状なのである。神戸にもかつて定休日以外は毎日フラメンコを実演するタブラオがあったが去年秋に閉店してしまった。いま関西圏で毎週一回でもフラメンコライブを実施している店はカルメンを含めてもそんなに多くないだろう。いわばカルメンは関西においてフラメンコが見れる希少な店のひとつなのである。関西にいるバイレたちの数は多く、カルメンに出演していない人たちも多い。一方で、ライブに必要なカンテ(唄うひと)、ギターラ(ギター演奏者)はだいたい同じようなひとが順繰りにタブラオに出演している。いわば「関西フラメンコ村」の村民といえいいのだろうか。／10月「Mélange」例会の読書会は詩人・にしもとめぐみさんにランボオの詩について語ってもらいます。(大橋愛由等)

◆知らないかたちに恋して

大西隆志

湯で顔を洗った朝
石鹸で流れる昨日
物忘れにつきそう
口から漏れる言葉
誰にも届かない微
おびえていたのは
何千回にわたって
発した言葉の消滅
四つ辻に立ち続け
和辻哲郎の羽織に
絡みつく仕事の紐

天候の挨拶が零れ
歩く人は帰還した
一日の歩数に光を
俳諧師の夜歩きに
僕も付き合ったか
月夜ではないので
難儀したのは君か
付句のだらしなさ
足を取られる程に
言葉に騙されては
放屁もひねり出す

土地に縛り付ける
都からの距離感に
歓喜したい友人よ
家から家へ日暮れ
一生の朝に起きて
蟻の集まる庭へと
四方への横臥さえ
物ぐさ太郎と次郎
に投げかてみよう
昨日のかたちから
明日のかたちにへ

◆リングとバスケット

高谷和幸

これの本質に媒介する手段はない。これの周縁につながるものを並べること、アナロジーの集約を替わりのイメージにはできない。二次性としてそのものを収納する、籠・匣・抽斗と並べてみても冷蔵庫にちりばめられた星座のようで核心にたどり着かない。隠喩としてこの球体がなぜ生まれたのか。このような物質的想像力はこれを法則的現象に還元してしまうので無意味である。「知恵」という自然界に無いものがある。感じて接近できる期待を抱かせる。精神科学でこれを感じることは出来ないが、この記憶データにいつでもアクセス可能だと安易に想像しがちだ。しかし赤い色彩温度や民族由来の味覚など、弁証法の双方の翻訳作業の煩わしさに人間のニューロンは耐えられるほど強くない。可能な限り多元的に、これは量子物理学的に振動する紐だと思ふのもここでは本質の判断を遠くにすり替えることになる。ある男の寓話がある。彼はバスケットにこれを入れて野外で食する習慣があった。ところが、ある日うっかりとこれを入れるのを忘れてしまっていた。バスケットの中のこれは固有のオジナルなものだ。蓋を開けると、その行為が自分では分からないリアルなリングが出現させていた。

◆中腰

野口裕

ほんの一瞬
 朝焼けに古代が蘇る
 まざまざと見えたのは
 盟神探湯の前に引き据えられた罪人
 お前は何をしたと 問われる
 慌てて幻想を打ち消し
 ゴミ捨て場に佇むと
 しばらくして ようやく
 片手のポリ袋を手放す
 ざつと一日の予定を
 頭に繰れば
 猿から人の連続図の
 途中にある
 どちらともつかぬ姿勢に
 なっていた

◆電子音声 詠

岩脇リーベル豊美

潮風通信 電子音声で訃報
 香港見棄てず 飛行機とばす
 秋夕暮れ 伊呂波伊呂波と独楽廻す
 ポストモダンの只管打坐 脱落
 宝くじ高額当選者への マニユアル
 密航者巡る 漁村の岸壁一周
 心の距離 娑婆を転々と心身
 地殻変動 人身事故 催涙ガス
 嘴も爪もない 海岸線の風靡
 琥珀の三段論法 嘘の臭い
 旅空めく出勤 霧朝に発つ
 所得税申告 秋句浮かぶが忘却
 合歡れずメタファ 鮮度落とす
 涙目で産卵亀のように 子を迎う

◆羊歯

中嶋康雄

羊歯が今年も生えた
 ミニカーが
 まだ止まっている
 ドアを開けて
 とどろき降りてきて
 そつと
 錆びた思い出を
 葉の底に沈めている
 季節外れの風鈴が鳴る
 古い蟬の抜け殻が風に飛ばされる
 わけのわからないゴミが迷い
 わけのわからない言葉がしゃべり
 わけのわからない安住が続く
 なにもかも脱げ落ちてゆく
 取り返しのつかない場所へ
 明日はきつと
 もつとあやうい
 ずつと向こうまで
 だましてもごまかしても
 だましてだましても
 ちりのよすがさえ

盗まれてゆく
 もやもやが
 不安な目で
 黙ったまんま
 最後かもしれない羊歯が
 枯れている

◆餡パン

中嶋康雄

びつくりするほどからつぽで
 のみほされたベットボトルよりもからつぽで
 ただただころがるように歩いている
 からつぽもみだれている
 そつちやあつちで小便だけして
 また眠っている
 泡のように消えてしまう
 嘘のきのこのまっただなかで
 毒と膜をたれながして笑っている
 「おじいさん、柿の実がぜんぶひからびてい
 るよ」

穴が空いて向こうがみえる

酷暑がもどり
 ひさしぶりに出会うあなたは半分はだか
 びつくりするほどたれさがっている
 鎖骨もひからびている
 高層ビルの影溜まり
 鉄を持って立っている
 異常なほどびくびくしている
 色が疲れているコンビニに転がり込み
 おにぎりを手にとつて
 床に捨てている
 じつと見られている
 制服がぬれている
 餡パンを手を取って数秒見つめた後
 チョキチョコキと袋を切つて
 うしろに血だらけの男がいる
 食べかけのパンを見ている
 手をのばしてくる
 舌がゆれて
 血がぼたぼた落ちている
 顔が光にあたって消えてゆくの
 男はパンを食べることができず
 血がぼたぼたと

本の一と皿

牡蠣の中の宇宙

子どもの鋭敏な味覚には「敵」だったのに、いつのまにか好ましくなっているものがある。

小学生の頃、牡蠣フライが嫌だった。牡蠣ごはんも。一口かじると、得体のしれない暗い緑色がのぞく。丸ごと口に放りこめば、苦みを帯びた磯臭さが鼻の奥まで広がる。それが今では牡蠣小屋や牡蠣船、春夏でもオイスターバーを、何十メートルと先から見つけてわくわくする。

年月だけでなく料理と物語の海が、牡蠣にぞつと鳥肌立つ感覚をすこしずつ洗い流していた。イシャウッドの『さらばベルリン』には、プレイリー・オイスター(草原の牡蠣)が登場する。グラスに生卵を割り入れ、ウスターソースを落とし、混ぜてひと飲み。女優志望のエキセントリックなヒロイン、サリー・ボウルズの乱雑な下宿では、酔いざましというより主食である。ヒトラー台頭前夜、はかなく狼狽な夢の街には、贅沢貧乏のフエイクな「牡蠣」が乙に似合う。そんな感慨をもてる頃には、本物の牡蠣が「天使」でもあると知って、心の距離が縮まった。エンジェル・ス・オン・ホースバック(馬上の天使)と呼ばれるのは、牡蠣のベーコン巻き串焼きで、オードブルや口直しに手堅い一品なのだ。ジェームズ・ボンドまでもが、ドクター・ノオに囚われながら余裕綽々と、夕食の締め括りに所望する。ヘミングウェイにも、天使のような食べ物であっただろう。

『移動祝祭日』で回想する駆け出し時代、一九二〇年代のパリ。カフェでの書き物が一段落して、牡蠣一ダースの濃厚な海の味わいを辛口ワインできりりと洗ううちに空虚が幸福に変わっていく描写を読めば、こちらまでシエイクスピア喜劇の台詞よろしく、「世界は俺のオイスター」、なんでも思いどおりだぞという心持ちになる。(シエイクスピアの「オイスター」は、実は牡蠣ならぬ真珠貝なのだ。)

無敵で華々しい、お高くとまった天使ではない。ティム・バートン描く、憂鬱な死を迎えるオイスター・ボーイや、ピーター・ラヴゼイのミステリー短編で思いがけない事件を起こす独身中年女性オイスター・ブラウンのような、異形のブラック・ユーモアが殻に潜む。清濁あわせのむゆえの滋味なのだ。こじ開けられ、レモンを絞られ、煮られたり焼かれたり。エロティックな雑誌のタイトルにまで使われてしまう牡蠣。どれほど無体に扱われても、もつとかぶりつけと「無私に寄り添ってくれ」牡蠣は「どんな宗教より美しい」と言う、サキの『クロウ・ヴィス物語』の生意気な主人公にうなずいてしまう。

長いあいだ貧しい庶民にも、財布とお腹の味方であった。サラ・ウォーターズの歴史ロマンス『ティップリング・ザ・ベルベット』の終盤は、ビクトリア朝のロンドン下町での牡蠣づくし。ヒロインは故郷の港町を離れ、男装の麗人になって上ったり墮ちたりの運命をたどるが、家業だった牡蠣食堂での母のレシビを思い出してこしらえる牡蠣のパイ、スーブ、グリル、酢漬け、クリーム煮が、真実の愛を深めるきっかけになる。

わが家では母より父のほうが海産物にはこまめで、晩酌用に茎わかめの煮付けだの、鰯のなめろう、なまこ酢だのを、さつと作った。親子とも頑固者で、私がとうに十代を過ぎても度々ぶつかりあったが、旬のおいしい肴、とくに酢牡蠣でもあれば、阿吽の呼吸で小皿を運んでお相伴にあずかり、並んで食べる。お買い得の殻付き牡蠣を私が見つけ、オープン焼きして出したこともあった。詩人シエイマス・ヒーニーが牡蠣を描けば、口の中がオリオンやスバルの世界に繋がったが、SFと旨いものが好きで、妙に博識だった父は今ごろ、そんな宇宙に遊んでいるかもしれない。もはや宇宙も「マイ・オイスター」だとしても笑いながら。

①抒情詩人として

プロレタリア文学(詩人の旗手として著名な中野重治であるが、詩人・詩作品の基層を考える時、抒情詩人であることが指摘されている。『詩誌』『驛馬』は最初からプロレタリア詩人のグループとして出発したのではなく、生活的なヒューマニスト詩人至生屋星(初期)の強い影響の下に集った若い詩人のグループ(岩波文庫版『中野重治詩集』解説・壺井繁治)だったことが判明している。中野本人もこう認めている。「たい日本には、文学の世界にも、先輩と後輩の関係、師匠と弟子の関係というものがある。その点からいえば、私は至生屋星の弟子の一人である。」(岩波文庫版『中野重治詩集』後書き)

わかれ
あなたのやさしいからだを
わたしは両手に高くさしあげた
あなたはあなたのからだの悲しい重量を知っていますか
それはわたしの両手をつたって
したたりのようにひびいて来たのです
両手をさしのべて眼をつむって
わたしはその沁みてゆくのを聞いていたのです

女西洋人
これはまたどうしたと言うんだらうなあ
あの人の頼みなるのを見ているうちに
おれは少しずつ悲しくなって来たがなあ
少し寒いようで少し恥かしいようで……
どうしておれにはこんな事がいつもいつも
悲しいんだらうかなあ
おれやひょっとどうにかなつて了うんじや
あるまいな

②プロレタリア詩

もういちど壺井繁治の解説を引用してみよう。「彼(中野)はプロレタリア詩人の中で思想性と抒情性を最も見事に統一した最初の詩人であり、彼の詩の完全度の中味は、いわばこの思想性と抒情性の統一にほかならぬ。」戦前の思想弾圧された時代は逮捕・転向を余儀なくされた中野だったが、戦争がおわり、日本共産党の党员として活動をはじめ、左に引用した有名な作品を生み出したのである。

雨の降る品川驛
辛よ さようなら
金よ さようなら
君らは雨の降る品川驛から乗車する
李よ さようなら
も一人の李よ さようなら
君らは君らの父母の國にかえる

君らの國の河はさむい冬に凍る
君らの叛逆する心はわかれの一瞬に凍る
海は夕ぐれのなかに海鳴りの聲をたかめる
鳩は雨にぬれて車庫の屋根からまいおる
君らは雨にぬれて君らを逐う日本天皇をおもい出す
君らは雨にぬれて 髭 眼鏡 猫背の彼をおもい出す
行つてあのかたい 厚い なめらかな水を たたきわれ
ながく堰かれていた水をしてほとぼらしめよ
日本プロレタリアートの後だて前だて さようなら
報復の歓喜に泣きわらう日まで



③抒情と時代相との桎梏

中野がこだわった詩の抒情性。こうした姿勢に対して、中野への批判も積み重ねられてきた。戦前(戦間期)における詩の活性化は、国家による文学の統制・弾圧の前に潰れてしまった。中野はダダイズムやシュールレアリズムが活況を呈した状況において、あくまで詩の抒情性を優先したのである。「特にダダイズムにおけるこれまでの詩的概念の全面的否定、シュウル・レアリズムにおける外的現実と断絶した火元での内部秩序の形成、あるいは無意識的な世界における錯乱的なイメージの自動的記述方法による(異常な言葉の組み合わせによる)秩序化にたいしては、彼の新しく到達した世界観にもとずく彼自身の内的秩序は対立(壺井・解説)したのである。」

歌
お前は歌うな
お前は赤ままだ花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやみや女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそそとしたもの
すべての物憂げなものを撥き去れ
すべての風情を擯斥せよ
もつぱら正直のところを
腹の足しになるところを
胸先きを突き上げて来るぎりぎりのところを歌え
たたかれることよって弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気をくみ来る歌を
それらの歌を
咽喉をふくらまして激しい韻律に歌い上げよ

お前は歌うな
お前は赤ままだ花やとんぼの羽根を歌うな
風のささやみや女の髪の毛の匂いを歌うな
すべてのひよわなもの
すべてのうそそとしたもの
すべての物憂げなものを撥き去れ
すべての風情を擯斥せよ
もつぱら正直のところを
腹の足しになるところを
胸先きを突き上げて来るぎりぎりのところを歌え
たたかれることよって弾ねかえる歌を
恥辱の底から勇気をくみ来る歌を
それらの歌を
咽喉をふくらまして激しい韻律に歌い上げよ

④中野詩が訴えるもの

中野の詩作品は多くない。戦後になって彼は、評論・エッセイ・小説の世界にその活躍の場を求めた。わたしが引用した岩波文庫版『中野重治詩集』の初版は1956年(昭和31)である。戦後の混乱期がようやくくずまりかえる頃だった。こうした時期に編まれた中野の詩集を21世紀となった今に読むというのとはどんな意義があるのだろうか。ひとつの詩を引用してみよう。

新聞にのつた写真
ここに
上海總工會の壁の前に
足をふんばつて人殺しの顔つきで立たされている
ごらんさい 母よ
あなたの息子が何をしようとしているのかを
あなたの息子は人を殺そうとしている
見も知らぬ人をわけもなく突き殺そうとしている (略)

顔そむけなざるな 母よ
あなたの息子が人殺しにされたことから眼をそらしなざるな
戦後社会というのは、日本と日本社会にとつて、戦中の国家の無理につきあわされ散々な目にあつた「被害者」の側面が社会の全面に打ち出されていた(もちろん戦犯を糾弾する動きもあった)。海外領土を一气に失い沖繩を除く日本列島に閉じこもってしまった日本人は被害者としての戦後を歩み始めていたのだ。そうした状況の中で、中野は母に呼びかける形で同情であるすべての日本人に対して、戦時中の所業を告発しているのである。その史実を詩に表現する中野の感性はいまでも評価できよう。

◆うす風が

月村 香（月式部）

もうこんなに
うす風に義務の漂うなら
赤いお石やブルーのお石、金だら
もいら
いや
そうすると
フランス語もラテン語も
ギリシヤ語も
おまえはいら
少し頬に打つ

通りすがりの虫の羽ばたが
こんなにも
おまえたちを観察するなら

わたしは
わたしをどうにもできないだろう
ひとつする仕事で
しびれる頭の鉢が
助けてくれなければ
わたしのものにはおれないと
言う
きょうの天気は
昼過ぎの通り雨
せみの死骸は上を向いて五つ
もうこんなに
うす風が

◆ショックなことがあると、 すぐ目がまわり気を失ってしまふ私

黒田ナオ

目が覚めると海の底にいる
誰もいない
お前はいつたい
何をやっているのだ、という恐ろしい
悪魔の声も聞こえない
くるくると目がまわる
とまる
またゆれて
目が
ついさつきまで
仏蘭西料理店で
舌平目のムニエルを食べていた
はずなのに
気がつく

平目みたいに
海の底にへばりついて
砂の中に潜り込んで
じつと水の中から
遙かな空を見上げて
きらきら、きら
いくつもの泡、流れ

ああ、またここに来てしまった
ごめんなさい、ごめんなさい
せつかくの仏蘭西料理店だったのに
ごめんなさい
平目さん、ごめんなさい
大切な命を無駄にしまって
ごめんなさい
いつそ私がこのまま平目になって
どなたかに
捧げたほうがいいのかもしれない、この命
そう思うとまた
くるくると
目がまわり
くるくると
世界はまわる

◆ 亡失のまなかい

大橋愛由等

とどろきが
消えかけて
さびしく
たたずむ
虚空を
つかもうと
フランス窓を
すこしあけ
左腕だけを
延ばして
ひよふひよふひよふ
浮遊しても
漂わず
ひとまわり
ふたまわり
見失ったばかりの
バジルの香りの
風たちの

行方を
さがし
有機も
無季も
照葉樹も
枯山水も
革命家も
剥落者も
あれかこれか
ではなく
わたしたちと
あなたたち
遡行の先は
後ろを振り向いても
哭いてみても
視覚しえない
あの
始原の
ありとある
緋色と紺青が
発語されないままに
集蔵され
全一の

こすもすが
あらい
対自している
トポスに
あなたと
わたし
どれほど
周回し
越境しても
美麗な
鉱石を
はべらせても
行き着く
ことはない
この
心のきしみ
赤い茎を
何節も
折っては
戻して
表象の蝶たちが
わたしたち
の蔭を喰らう

◆ 呪われた詩人へのオード

にしもとめぐみ

ランボオによって
焼き捨てられた
詩集……と

太陽と一緒に行ってしまった
きみ
残された詩は 地獄の数年に

詩人になりたくて
詩集を出版することを
夢見てパリへ

製本された『地獄の季節』は
支払うこともできず
お蔵入り

1873年11月きみは
文学に
別れを告げた

ユーゴーは
きみを
「こどものシェイクスピア」と

人間 天使 悪魔
ランボオが 今も
詩人の前を歩いている

◆骨董喫茶店

高木敏克

僕たちがようやく辿り着いたのは、丘の中腹南斜面の道路沿いの、石造りの建物だった。僕がそこを気に入ったのは、それが単なる石造り風なのではなく、本当の石造りであったからだ。石はそのあたりから集めてきたような質の悪い石灰岩で、砂っぽくて黄ばんだりくすんだりしていた。

僕はその外観よりもむしろその内部が気に入っていた。石の内壁には、よく観測すると貝殻の化石が見つかった。壁も乾いていたが、松の天井や床も乾いていた。そのため、コーヒーマシンの香りが、明るい空気の中で、何の濁りもなく、部屋中に漂っていた。

何時訪れるときも、僕は自分の席を決めていた。貝殻の付いた大きな素焼きの壺とニンフの石像の間に僕の古いソファアの席があった。そこに座ると、僕は例えようのない幸福感を味わった。

自分の骨がまるで快い音を立てながら震えているように思えてならなかった。

その日も室内は乾燥していて暖かかった。窓の外には南の空が輝いていた。光を浴びながら、僕は自分の身体が骨董品と共に暖まり、骨という骨が石のように乾燥してしまおうという不安な幻想に酔いしれていた。やがて総ては砂になるだろうという予感が気持ちよかった。さらにその砂の流れるイメージが深い眠りの中に僕を誘おうとしていた。眠りに誘っているのは音楽でもあった。流砂のようなギターの音が、アラベスク調の旋律を終わることなく流し続けていた。乾き切った流木のような男の声が、それに絡まっていた。

その眠りを妨げるように、何時の間にか二人の男の姿が斜め向かいの席に現れた。背中を向けているのは白髪混じりの五十歳代の男だが、もう一人、その男の影に隠れてこちらを向いているのは二十歳代の若い男だった。その若者がこちらの方を、時々睨むように伺っている。目の前の中年男にかなり気を使っているようで、おとなしく彼の話を耳を傾けているようだが、その若者には何処かで出会ったことがある。その首筋の筋肉が特徴的だ。思い出したのは、山の上のスポーツセンターの風景だ。だが中年の男のぼそぼそとした話口から聞こえてくるのは、「サナトリウム」「治

療」「幻覚」「睡眠」といった単語である。二人のテーブルの上には何やら写真が乗っていた。僕が手洗いに立ち、その前を通りすぎようとすると、中年の男はそれを何かいかがわしい写真のように隠そうとした。用を済ませて席に付くと、どういう訳か彼ら二人の会話が手に取るように聞こえてきた。どうも僕が帰ったものと勘違いしているらしい。

「この男を知っていますか？」

「さあ、こんなに崩れていると、良く分りません」青年は、必死で表情を変えない努力をしているように見えた。

「誰がやったんですか？」と、青年は聴いている。

「それが分らないから君に聴いているんじゃないか」と、胡麻塩頭の男は突っかかっていた。

「へえー、こんなのたたくさん写真を見なくちゃあならないんですか？」

「大変だけど、一人でも名前が分ればいいんだ」

ちらつと見た僕の感じでは、それは検死写真だ。名前のない死者は恐ろしい感じがした。単なる物として転がって、完全に自分自身の居場所を見失っていた。

◆益田っこ通信

元正章

▼50号／「お前の足もとに気をつけろ」

〈2020.10〉

先般、BSでフェリーニ監督の「道」を観る。これで2回目。ジェルソミーナの曲が、今も脳裏に響いている。映画「道」は何を言わんとしているのか、うまく答えることはできないが、胸をえぐられるような感動に言葉を失っている。「海や空のかなたに、神を垣間見る。それは魂が深く必要とする、神の愛と恵み」。「クオ バデイス（主よ、どこに行かれるのですか）」。女旅芸人ジェルソミーナの人生は、ただただ痛々しい。最期は、野垂れ死。「彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに」（イザヤ書55:13）。しかして、「世の中のすべては何かの役に立っている。それを神は知っている」。

「益田っこ」50号を迎えた。「そんな情報（文章）は、一体誰のために、何のためにあるのでしょうか。そんな情報（知識）を知った人は、幸福になるきっかけが生まれるのでしょうか？」との批判を受ける。自分の「立ち位置」が、牧師ゆえに過酷にも問われ続けている。「だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません」（ロマ書15:2）。つまり、人は自分一人のためにだけ生きてはいられない生き物なのです。では、自戒すべきこととは、「お前の足もとに気をつけろ」。『日々是好日』の著者・森下典子さんに言わせれば、「長い目で、今を生ぎろ」。

（編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏（神戸市出身）が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです）

神戸詞あしび

144-2020.10.25 大橋愛由等

ワインの話をしよう。仕事柄、スペインワインと接する機会が多い。年に一回、大阪でスペイン食材の商談会が開かれる。出品されるのは、ワインだけではなく、食材も含まれる。9月26日にその商談会があり大阪に向かった。

会場では、日頃仕入れているエージエンシーのブースにまず挨拶をしてさつそく試飲させてもらう。この商談会は毎年6月に行われるのだが、コロナ事態の影響で中止になったと思いきや、延期されて開催されることになったもの。今年も出品業者も少なく、会場も三部制に分かれて入場者数を制限していた。各ブースには出品者と来客者の間にビニールシートが貼られている。ワイングラスはなく、小さい塩ビの使い捨てカップで飲むことになっていた。この商談会、毎年のように参加するようにしている。スペインワインの変化が手に取るようにわかるのである。わたしは樽香をたっぷりつけた「こてこて」なワインが好きなのだが、最近のスペインワインは、飲みやすくソフトになっている。これは、スペイン人そのものの嗜好の変化と、アメリカという巨大市場を意識したことが原因であるように思われる。

もうすこし具体的に言うと、こうした変化は、樽熟成させるために使うオークの選別に現れている。かつてはアメリカンオークを使っていたのだが、最近ではヨーロッパオークを使うことが多くなっている。ヨーロッパオーク樽で熟成する方が、爽やかな(ライトな)味わいに仕上がると言われる。また従来どおりアメリカンオークで樽熟成しているものも、その期間を短くして、ヨーロッパオーク樽に移し替えることをボデガ(蔵元)が売り文句にするくらいなので、わたしのように「こてこて」ワインが好きな人間にとって、かなしい事態なのである。

かつてスペインワインは、たっぷりと樽

スペインワインの魅力と嗜好の変化



スペインの白葡萄酒の代表的な品種のひとつであるヴェルデホ種。主にルエダ DO で生産されている。

熟・瓶熟させることがステータスであった。GRAN RESERVA(グラン・レセルバ、最低60カ月熟成、このうち樽熟は18カ月上の赤ワイン)ということだけで、そのワインは崇敬の的だった。それが最近ではRESERVA(レセルバ、最低30カ月熟成、このうち樽熟は12カ月上の赤ワイン)を通り越してCRANZA(クリアンサ、最低24カ月熟成、このうち樽熟は6カ月上の赤ワイン)をいかに上手に仕上げるかにボデガの関心が移っているような気がする。またこうしたGRAN RESERVA-RESERVA-CRANZAといったクラス分けを気にしない新しいボデガも増えている。さらにはかつてはDO(原産地呼称・Denominación de Origen)で造られたワインでないと信頼が得られなかった。新たなDOを取得するために多くの努力が要求されたが、ここ10年あたりで、あえてDOを取らない意欲的な産地やボデガも多くなっているという事実がある。

もうひとつスペインワインの最近の特徴として、使用するぶどう品種の変化がある。最近では人気のフランスワインの品種を在来種に混ぜて使うことがごく普通になってきた。マーケットを意識しているのだ。こうした傾向に対して、わたしはスペイン在来種のナシヨナリストであろうとして、仕入れるワインを選別している。白ワインでいえば、マカベオ(Macabeo)、アルバリーニョ(Albariño)、ベルデホ(Verdejo)といった在来種だけで造られた白ワインしか仕入れないことにしている。そしてもちろんこれ以外にも、知られていない在来種もあるのも知っている。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.156
神戸

2020年10月25日 通巻156号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)